

二十二、旅より本部へ

本部の皆様よ。お変わりはないか。十二月三十日本部に帰ってから、二月五日まで、三十八日間、私は本部の皆さんと一緒に暮らした。そして二月五日再び旅に出た。その間ほとんどの日を講義に費し、外に出たと言えば床屋にたった一度行っただけであった。五日夕方六時、皆に送られて旅の人となり、河内支部へ到着した。一行八人無事、急に多人数を失った本部の淋しさが思われる。

河内の夜は凍えついて寒い。一人中務君の二階に迎えられて、おちついた部屋の人となる。またしても本部の皆のことが思い出される。病床の母は何も言わずに泣いていた。気にかかつてならない。「お母さん早くよくなつて下さい。」と思いつづけて夜がふける。今晚は休みである。ほかの連中は旅館である。

佐々木君は今日も念仏しつつ、印刷場に入っているであろう。そのほかの者もそれぞれに働いていてくれるだろう。来る日も来る日もつぎつぎと本部のことが思い出される。だれもかれも念仏しつつ仲よく暮らし、朝夕の聖勤がいつものごとく丁寧になされていよう。ここは、講習ではあるが、私は僅かの暇にもペンを握って原稿を書く。講習では大経を講じている。

家内からの手紙を受け取る。

「合掌南無阿弥陀仏。お手紙勿体のう拝見致させて頂きました。引続いでのご講義でいかばかりかお疲れの御事と存じ上げます。病みたもう母上を後にしての御旅、さぞかしみ心のお痛み遊ばす事とお察し申し上げます。至りませぬ私、及ばずながらお留守中の御看護は力一ぱいお念仏とともに果たさせて頂きますから、あまりご心配下さいませ。七人のご兄弟がございましてもお母様のお側にはべるのは私一人、その深い因縁を憶い、ご兄弟のお身代りにも、どんなにもさして頂きたく心得て居ります。でも休んでいらつしやるお母様にかえて私がおいたわり頂いて居ります。絹家が絹家かと仰言つてばかり居ます。五日には、あなた様とのお別れがととてももお淋しかったですように拝します。あれから後も随分お泣きになりました、夕食が八時になりました。この時私はしみじみ思いました。お念仏の人とお念仏のつながりが地上最後の、たった一つの最上のつながりだということ、親子でも夫婦でもお念仏以外でのつながりは地上最後の日、いえ今日の生活に、真のつながりのないことを。いろいろとお慰め致し、とうとうお念仏申すより外私にはすべがございませんでした。お母様がお眠りになつて後、私も私の部屋で泣いてしまいました。地上でのほんの一時の別れなのに……………、最後のお別れの日を憶い、いよいよみ教えを忠実に生活させて頂かねばと心深く感じました。

一月一ヶ月間、限らないみ教えを私一人に頂きながら、その時はなかなかご親切と分らず、はねのけてみ教えにそむき……………高須の停留所で電車の影を見送りつつその憶いが胸一杯をかすめて電車の方に向かって手を合わせてお詫び申し上げ

ました。最後のお別れの日には、愛別離苦よりも、もつと深く迫って来るものは、み教えに不忠実な自分の生活全体でした。あらましな生活の一つ一つを見出させて頂いて御冥見を恥じつつ、お留守をさせて頂きます。有難うございました。一ヶ月間に続いて例会、そしてご出発前夜の座談会、光ということを中心にしてのお話、あの夜は嬉しうございました。そうだそうだと心が叫びました。私が頂戴でき得た限りのみ教えをこれから、如実に修行させて頂きます。いよいよお叱りを受けたく存じま

す。
六日には人数が少くなりましたので、母上お望みのおすしを作りました。お体工合は、相変らず悪くもなく、どことなくだるいと仰言いますだけで、下手でございましてもお料理は力一ぱいさせて頂きますし、喜んで召上つて頂きます。お手紙のみ言葉確かに拝受いたしました。七日も相変らずで頭が重いと仰言いますので、按摩したりなどで一日過ぎました。……中略……本部の台所もまだまだしまります。この度から御飯も麦飯にいたします。何一つ不足の声も出ません。有難いことと拝んでいます。買物も一切必要以外いたしません。薪炭、調味料などだけ求め、魚は時々鯛を求めるくらいで、できる限りしまつてゆきます。何かといくらでも申し上げたくりますが、後日にゆずります。本日は指が痛くて乱筆お許し下さいませ。本部員ならびに絹はすこぶる元気で働いて居ります。皆お念仏申して居ります。お大事に念じ上げます。

二月八日

絹家」

ただ念仏してこれを受け取る。

河内の聖講は人数は三十人くらいの静かなものではあつたが、河内支部十一年の過去のいかなる集会よりも、ありがたい会合であつた。外には私の好きな雪が降る。雪を見れば、わが故郷を憶い、しこうして聖人のご苦勞を念う。雪は私を深い深い追憶内省へとつれてゆく。何よりも嬉しく尊きは、わが背後に、念仏の本部あることである。だれ一人として念仏申さぬ者なく、知恩報徳の大行に乗托して生ききつてくれる本部の皆々のあることである。念仏すれば本部があらわれ、眼をつぶれば、本部が現われる。たとい、わが身は旅にあるとも、われは本部の皆とともに生きている。

生きる者には必ず背景がある。その人の生活が何であるかは、その背景によつて決定する。念仏の行者は、恒沙の諸仏に護念証誠せられるという。観音、勢至は、その勝友となりたもうという。されどこれは多くの場合、ただの話におわりやすい。しかるに、抽象孤立の世界より、私を没して大信海に入るとき、そこには、多くの念仏の同胞あつて、われを護念したもうてあるではないか。

『聖光』の二月号の大言地声、まことに心にしみ入りました。ありがとう存じます。一切の事を念仏を通して受け取らして頂きます。本部員一同すこやかに、ほがらかに、今日は講習最後の日、今日は、先生は岡山だと、あなたのみ後を追いつつ、あ

なたを念じ、あなたに生かされております。ご安心下さいませ。どんなどん底にも、落ちきつて不足も出さず、お念仏している本部員を憶いますと、私は片足もがれても、片手なくなつても皆様の下敷にならして頂くぞと思わせられます。」(絹家第二信)

あわれ、わが十八年のわずかなる苦闘は、今、この念仏の中に笑つて全我を捧げきる本部員を憶い、第一線に不惜身命の行歩を堅持する同胞を賜いぬ。雪の日の静かなる夕、念仏の奥に、この護念を憶うて涙なきを得ようか。

人は肉体よりも精神を尊ぶ。それあるがゆえに、美しき精神生活を成就するのではある。しかしまた、それゆえに、命を捧げるといふも、時に観念的粉骨碎身家になつてることが多い。命を捧げるとは易い。しかし衣物一枚を投げ出すことはむつかしい。身を与えられたる部署に捧げきり、貧しきに安んずることはさらに困難である。頭を大法の前に真に下げることはなおさらに困難である。

憶え、本部員よ。われらとともに、命を捧げ、一生をつくして、念仏求道、合掌精進、文字どおり生きぬきたもう諸菩薩大士のわれらとともにあることを。

人はただ一道を行歩しきり、全身全霊念仏になりきる者のみ、本仏の無量の徳を發揮し得るのである。

まことに如来は人生に具体的である。事実以上の事実である。われらは今、これを如実にわれらの周囲に拝むに、なんで全我を捧げきらずにいられようぞ。本部にあつて、遙かに第一線の同胞を憶え。力はおのずからわくであろう。

今日、われら一行の食卓には、山海の珍味佳肴が並べられてあつた。けれど、わが心内は、涙の淵となつて、箸をとるも、どうしても食することができない。わが背後に、ありありと浮かぶ本部員の顔と顔。時に、あの粥をすすり、味噌汁一ぱいに満足する皆のことを憶う時、なんで私だけこのご馳走に箸がつけられようぞ。われ、涙の内、その一皿を頂いて念仏とともに食をおわりぬ。ああ。われは本部員とともにあり、本部員はわれとともにあり。わが旅にあるとも、必ず本部員とともにあるとは、本年年頭の覚悟であつた。かくしてわが食卓より贅沢去つて、本部員は来りぬ喜び得る日、ともに喜ばん。苦しむ日、ともなるがゆえに。

念仏の心のゆたらかさよ。

人は、食物をとると言いて、食物を摂らず、栄耀栄華を摂り、贅沢を食う。食物は「保命の葉餌」である。飢えと渴きを満たせばすなわち足るべきものである。

古来の聖賢、食物のことに囚われ、山海の好食を貪つて生きたもうたであらうか。山海の珍味は、病人と、無意味に人生を徒食するの人に、せめてもの慰みに与うべし。われ、本年より、講演先において、馳走するを厳禁することに定めてしまった。かくて今、本年の旅をはじめ、実行に移し、心軽く身軽し。いよいよ大法の重きを感じ、念仏のありがたさを憶う。われはみなとともに生きる。

石井母よりの懇願やみ難く、梶原慶沢、柳田西信以下九名、岡山に來り、ここでも、講習の形をとり、三日間猛精進は続けられたが、それもすでにすんだ。

岡山の地は正法の器がかなり揃つてはいるものの、今、大いなる展開を要するの秋となつてゐる。

われらは何よりも停滞を誡めねばならぬ。信仰は無限の展開にあり、成長にあり、一処に止まる時すでに、如来招喚の声にかわるに、人間の三垢がものを言う。垢や苔を喜ぶは、骨董趣味である。信仰は風流ではない。殻を破るものも正法であり、垢を落とすのも正法である。

世には、わが十年二十年の過去の感泣の涙の遺蹟に柱を立て、それに己を繩で縛りつけて、何事をもこの釘付の一点に結んで、動かぬ者がある。△△△の多くの人とお別れしなければならなかつたのもそのためであつた。太ることなき樹木は枯れており、流れることなき水は腐る。かくして懈怠なるものは、過去に生き、名利を求むるものは横に歩み、貪欲なるものは退転する。古きをたずねずして、新しさを求むる者はあやまる。

念仏の会座に集う者、みなことごとく念仏し、歡喜し、感泣するも、その多くは念仏歡喜相續せず、若存若亡して、愚痴去らず、平常無難の時は、いかにもよき念仏の人なるも、いざ大事とならば念仏もの言わず、まさかと言えば仏心人の世の指導原理とはならない。かかる様でどうして、終始一貫、人生そのものを正法の舞台となし、4順逆兩境をもつて念仏相續の助縁となし、全身全霊を念仏三昧となし奉ることができようぞ。

煩惱の喜ぶ道具の揃うた春の日のような時、欲心の満足を念仏によつて喜ぶもの大方の老人みなしかり、われらそれにとどまつてよからうか。

念仏行者の非常時は外にあらざ内にある。知らず知らずの間に、三毒我慢、人格の主座を侵して、慧命を蝕むこと、これ以上の大事はあり得ない。内、常に非常時たるを知らば、外の非常時、汝を苦しめざるに至るであらう。心して内に培え本部員よ。われらは如来聖人と一河の流れにあり。

日本全国が迷信の大洪水に荒されている時、私は現在の仏教陣營の状態を悲しむ。されどいたずらに悲しんでいても仕方がない。われらはまことに、真に、聖人のみ教えを聞き得たるを喜び、ともにともに、深く淳一に念仏して、一生よく貧しさに堪え、困苦に忍び、本願に充実せしめられて国土の底深く埋れよう。これ光明団々員の本懐である。

われは純粹念仏の同胞に包まれて、今日も本部に精進し続けるみなみなを思うこと切である。何すれぞわが幸の甚大なる。

われらはただ深くみ法を頂いて一筋に歩もう。

世には、円満居士、八方美人居士の多いことである。彼らは、偏ることを嫌うのあまり、生きるべき純一なる生命を持たない。偏執を誡めるはよい。しかし一道一心一行一運動に生きることなくして、二道三心四行五運動、さまざまなる声に従う、万屋万兵衛、八方美人、円満妥協居士の一生に、何がある。世間さまざまの声に満足を与え、なおかつ仏道を成就することはでき得ない。われらは幸である。世間の声を領解はしても、それに妥協するの要なく、去る人を追うを要せず、ただ教勅のままに一道を歩めば足る。

されど今、われらと真に同一の歩みを続ける同胞の助けによつて、われら本営に生きる者は、散兵線の同志を憶うて、自策自励し、精進しないでいられようか。

過ぎし日には、悲しきことながら本部の状況、意に満たざるもの多く、心を暗くせしめた日もあった。しかし今日、旅に聖戦を続けつつ、瞑目すれば念仏界裡、念仏の本部わが背後にあり。これ以上の百万力がどこにある。

岡山の同胞に涙とともに送られて、梶原、柳田、桂、大森、中務、藤井等の一行とともに大阪本部に移った。十三日昼席より、講義を始める。五島、松中の病まつたく癒えざれども、講義に出席するまでになっている。講義は現益讚なれども、正法ありがたし、まことに一期一会である。

「南無阿弥陀仏をとなふれば、この世の利益きはもなし。」南無阿弥陀仏を称うるとは、大行を念ずとなり、信ずるなり。一念の信力三世を貫いて利益無限である。利益とは何ぞや、文類正信偈に言わく、「信を發して称名すれば光撰護したまふ。亦現生に5無量の徳を獲しむ。」と。無限の利益とは無量の徳であった。徳は功德である、功は功能、すなわちはたらきである。徳とは得である。徳には、大用あり功能あり、念仏は無量の徳である。ゆえに無量の大用現前するのである。

しかるに、凡夫は、得を知つて徳を知らず、得を求めて、損得をわきまえ、徳即得を求めず、徳無きを悲しまず、悪には必ず悪の用あり、徳には必ず徳の用あり。されば、得の字は一なるも、大行による聖なる得と、煩惱に根ざす我欲の損得の得とがある。得より得への大転換こそ、信の一念でなくてはならぬ。如来の無量の徳を獲得して、世の損得を超えざるべからず、損得のみ考うるものは、得をするに似て徳を失い、ついに人生真実の喜びを得ないであろう。縁の下の力持ち、損をしつつ報いられざるに黙々の精進を続けたる人生記録の頁を持たざる人に、如来の本願がわかることはむつかしい。聖人のご一生は、そのすべてが、損と言えば損の一生ではなかつたか。縁の下の力持ちではなかつたか。

一月の初めより、あの愛酒家であつた私が絶対禁酒したために、みなのものに心配をおかけした。しかし私は、あれを思いこれを考える時、まず私の酒を禁ずるよりほかに経済上の問題に手のつけようがなかつた。煩惱の満足をとりあげる苦よりも、もつと深い苦を感じるがゆえであつた。しかしそのためにみなに心配をおかけした。けれどもうれしいことには、大阪に来て街の湯にゆき、体重を量れば、少しも減してはいなかつた。河内、岡山と、早朝より深夜まで、あの激しい行事の中にいつつ、少

しも疲れも衰弱も出てはいない。心配しないでくれ。そして私もあまり困難を感じなくなつた。

本部員よ、いよいよ念仏申せ。微塵の荷物のなくなるまで念仏申せ。富士の山よりも重い荷物の肩にあるまで念仏申せ。「本部の屋根の瓦の一枚一枚までが念仏するまで念仏申せ。」私は今、旅にありつつ、念仏によつて生かされる本部を憶念して、限りなき喜びと安らぎに、無事にみ法の旅をつづけている。母上の病の快方に向かうと聞くもうれしい。思うままを書いて本部に送る。南無阿弥陀仏。